

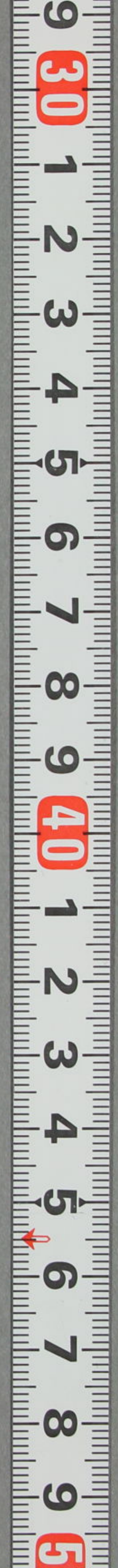


淨世形六扇屏

全



^ 13  
3996



門 13  
3996  
號  
卷

ACCOUNT  
OF  
A JAPANESE ROMANCE.

明治己巳歲初冬

浮世形六扇屏

松園藏版

松園藏

41-6971

浮世形六枚屏風

昔々關東の官領濱名入道の一族、網アホシ乾多門太郎カネヨシ買好とカネヨシの者、所々上總の國半國を領し、文を好み武に長じ、名たる家来も多し、威勢イキホシおろく官領、又劣らば相州鎌倉小袋阪の傍、善美を盡し、館を構へ、又大磯金澤ふんど所々遊アソビるやうの亭を設け、つとをたかく富

東

松園藏

柳亭種彦著  
松園梅彦閱

榮えりく頃しも煉の末つり今を盛りの紅葉  
眺めりく射鳥狩せむやと兼て修理あさし大  
磯の下館つおむむ終日遊びりしてや黄  
昏の頃鴨立澤まで到りて實ふ心あは身はも  
哀せり知られり鴨立澤の秋のゆふぐれと西  
行法師がよめもしも宜き人家を離れ  
れたが傍は古またる辻堂の建てりて最物淋  
しを慶あふ折しも遙う向ふの方と鴨の羽求  
飼るる我近習の待りも御覽候へ鴨立澤の名  
はわいて鴨のおまゐるも一入興り先づ志を

し這堂は御腰をかきれ鴨の飛起つ御覽たま  
し時も秋のゆふ暮あふ西行の歌の容は少し  
も違ひ候まじとひひれを多門太郎とち笑ひ  
鴨立澤とよみたるる飛びたりことよむららば  
只何とあく形をみて鳥のたぐるさむ我去あふ  
彼評の體を画くは必らば鴨の飛とを我画く  
るくくはぐも誤あふは今求飼もやを飛も  
やに物淋しがる立るるも鴨立澤とをひひ  
くれと物語を給へども歌道は疎き侍をよくも心  
得るりやうそのそと聞あふし彼方鳥の居

るところまでを、凡そ三十間もゆくんと何氣なく  
去ひつづる然、一人の侍まゝ答ぬ、否、鳴とつゝ  
者も鶴も等しき小鳥あり、斯く鮮明は看ゆるも  
二十間よりよも過じと答ふるも、以前め侍頭を  
掉す人々の哄く聲は怖れもやらぬ立ちゆくも  
遙くは隔たる驗あれ、ゆやく試るも拳をつひ小  
的を射るも心してたれし見ると、さうも遠く  
を覺へじと兩人も去ひつゝ、此許に更も果つ  
るも、やうも見えぬ時、員好が近習め士、水間宇  
源太、躬、同苗島之助、その歳やうやく十四歳御

側きつゞの小扈性も、今日もお供も在りける  
が、二人が前も進み出、先づ暫く此許に止り給  
へ、某が細矢を以て遠近を測り見ると、袴の  
稜を高くとも揚つ、弓も矢、夏、ま、ま、ち、番、へ、と、つ  
む、つ、ぞ、弾と發てど、箭も危くも鳥の脊をまづつて  
蘆間も止り、鳥も愕き飛去り、多門太郎大  
び、怒、ま、汝若輩め身成以て古老め武士をさ  
お、ま、人、も、た、め、ま、ぬ、で、あ、し、か、て、あ、ま、つ、さ、へ、鳥、を  
射、損、じ、面、目、あ、く、る、思、ふ、は、や、と、さ、ん、ぐ、よ、叱、り、給  
へ、ま、島、之、助、も、其、怒、ま、面、も、顛、れ、弓、を、側、へ、撲、地

と擲めけ彼矢採て来る處しと僕も去ひ付くる  
りど何れを志しん澤下を立ちやうくとして  
據ひと至件め矢をきし出せを嶋之助手に把り  
掲更に懼るゝ氣色もあく主人の前は進み出鳥  
めお坐居る其處を近しとつひ遠しと去ひ二人  
が諍ひ果しあはれを其間を測り諍論を鎮め  
んとぞんじ始めよを遠近を量んとぞ申つとぞ  
鳥は射中んとぞ申さばこれ御覽候へ夫を故に  
根矢を用ひば木撲頭の墓目めうちへ鳴め羽を  
とちめられぬ矢めとぞんじしと疑ひあつ東夷

め荒られし歌乃こそ知らばとつえども所  
もところ折もれを彼鳥を射留んゝ且つ以  
て候へばつゝ小腕とつひ未熟め其目  
射外まは鳥め羽を墓目れ止め候とぞ其間近き  
驗しあれと言葉よぞ言ひ放つ多門太郎は  
ゆく怒るれめは道理あるもせよ主人と言  
むはやくをめし今抛去し其弓を予に擲あを  
しも同前其儘よきおきあを寵愛あつと道  
志くぬ嗚呼の者をぞあつと、並の人口は  
誹りやせんさつる時とぞ家の瑕瑾切腹さる

と奴あまを前髪ゆれど小兒も同前、うふよをし  
 てる勘當ふふを其處越起よと顔色變へ、礫と白  
 眼をみひられど島之助も今更は何とゆえさん  
 言むらあ、大小さし、おれを凄寥と、其場をそのま  
 立ち竭まらる、此日島之助が父宇源太と御供  
 知ろくど島之助を面目あややれりひらん密  
 ちちるるく、父は對面さるるもあ、何地への  
 起ち竭まらん絶て行方を知まざらん。○這とて  
 後發端より八年程たちて後の譚あり、攝州中の  
 島の米商人は梶右衛門といふ者あり、歳老ゆる

まて一子あり、まられど、あるもめ、推擧る、佐  
 吉と云者を養子とあり、其身を八十餘歳して死  
 ぬ、梶右衛門の妻を法躰して妙贊と法名し、家  
 佐吉は委任あはれ、寺詣りて所在として、更は浮  
 世は交らぬ、然るに彼佐吉も若くは似合ぬ律義  
 あり、性質よく、妙贊を實の母の如くは侍ま、家業  
 大事と心懸、物觀遊山よさへ出で、まじり、つら  
 り氣鬱の病を引つごし、漸々顔色衰へられ、  
 封間との世はつひく、口軽き可笑男、ま、町風は  
 粧たる藝子の屬を喚寄て、佐吉が伽とあり、る

了が薬と金と利とよく少し心も浮立やうに見  
 え方々りり頃々如月中旬キナラギナカバ野山の氣色も春  
 めきりりりる櫻も稍咲初々れをぬく折ツク又鬱々  
 と引籠り居るうれを愈イ病重る病イ何國ナニクニも何  
 れ起ち出て氣をとくは又志くぬく心と母妙  
 贊の勸めよまのせさゆらぐ大和巡り旅立舊  
 き名所をも尋ねるやとて店ミセのこころ甲幹カネ又許ヨシ  
 あま跟者ウヅリ志やしく呂連リケンをそとくは起行キコウりる○  
 まるよま々南都南圓堂の側ソバもろよ年トシのころ十  
 七八とおぢおぢき女メ四歳許ヨシの女子コノメを連生リウシヨウ芝原シハラよ

出茶屋を構え彼處女を琴を彈ヒキ女の兒コを往來ユキの  
 人よ扇をさしつけ錢を乞ふ者あり容色キリガタの勝生  
 たる上又琴の凡音氣高トクくうう唄ウタふ聲コエも幽艶ユウエンけ  
 せば話し傳へ聞傳へ集ツクひ寄ヨる者少オホふううんんん  
 世ヨ男女の縁ヱあどゆやしむめをあり中の島  
 の佐吉サキらこの程マダ奈良ナラよ来キ芝シ辻ツジと云ふ處よ  
 逗留トウリウして居た星ホシしがふと琴コトの娘メを見添ミソめ  
 人を以て訊ヒキぬさせられこの女メを其名ナを操シヨクと  
 いひて非人袖乞ヒトカサの屬カよゆら元タ来キ浪人ナニの娘メふ  
 是コノと妙タカの身ミ質シツを貢コんとて其妙タカの女子コノメ小芳コトシと云

を連て斯くおきまゝに活計をなさるありと其  
 行状の正しき様まゝに思ひ弥増ゆひて  
 聞およびたる名所古跡をに見巡らば日毎かの  
 茶店よ来玉心をつけ物あはれ與えざるを  
 とあ言交し操も佐吉が美男にて志も情あり  
 きは悪ゆゑ思ひあがら身も賤したを觀視て  
 云ひ出ん便もあは互ひよ心よめと物思はせ  
 日々を過しりま○流石よ永れ春の日もや入  
 相の鐘の音櫻も人もちまぐはけり寂莫と  
 せしがやあは大きに退屈したと茶屋が床机を

起ちつづるゑつれも浪華の島の内徳若屋の才  
 藏とて人よ知らせしおき屋の亭主水掉を  
 へ立倚りてさぞお待遠でござりませし人  
 這所へと人あは木蔭才藏を小音よあは入き  
 ちよつと話しを通ふそあはつよく百兩で得  
 心して勤勞したるも諾その金と姉さん女姑  
 御の大病をおりしやよと療治させたさをして  
 私グ得心でござりしグ躬を賣るよ孰グ何と申  
 しませしとるつえ義理のゆる兄さんちよく知  
 せし貴所の方へ参る迄はまが沙汰あは夫を



ゆく書てあつひ申したこの照文へ、兄さんゆ  
 判る密と竊と出して、こころが押ておきまうた  
 見まれば才藏感じ入る、どうもこそ昨日余又證  
 文を書てくまとの囁み又とゆるまい孝行娘子  
 その積りでは是うする、大事よわけ勤て給明日  
 の朝馬中頃、復輿吊らせ迎ひよゆき其照文  
 と金と引き換へ、まきぐ都合を宜うらみうの、有  
 がくみごきまき目くいの視えぬ母さんへ  
 お屋敷へ御奉公と上るとつみくおきまき人  
 られる承知、嚴口上で士の迎ひよ来るとまきうせ

まき人、慟わうでござんまよと、涙の面を横  
 と揺る、心を不便と想ひあがく、時と笑ひよま  
 らして、そくあんよの悄悄ちる、お、僥倖次第  
 で玉の輿乗物でよびやう、嘍々つみ出るの  
 と當前、まきあう阿主きぬ、お娘明日と才造を  
 劇しおまを別をう、○粵又南都般若坂、轎夫  
 の戸平とつみ者り、先年關東と下里、數村貞太  
 夫とつみ武士と足輕奉公して居たりしが、貞太  
 夫が妻初瀬が妹、花世とつみと密通して、花世  
 胎の身とまきしうを、詮方あくや思ひまき、花世

と連日、出奔あし、故郷あまごころ處に逃上り、  
程あく女子出生して、これをお芳と名づけ、今年  
四歳<sup>ヨッ</sup>まで成すより、○この戸平は朽葉とり、  
一人の老母あり、風眼とり、病より一年許り  
煩ひ、終に盲目とあり、れが夫婦が嗟大方あり  
此斯る所より又珍事とて出来り、関東に在りけ  
る戸平が主人數村貞太夫、故ありて浪々の身と  
あり、これをとりの活計もあきて、一人の女操と  
り、をさへ育ひ、く見え、れが妻の初瀬が計  
ひ、其方より右之<sup>トモ</sup>左之<sup>カ</sup>の習氣<sup>シツキ</sup>をよと妹の

花世が許へ娘操を送り、これに貞太夫より  
深く蓋<sup>ツ</sup>こころ、潜<sup>カ</sup>を任むよしと、密に妹の許へ  
去り、時々消息をとを交し、いと妹の心を休め  
んとめ、身貧の任居を知らず、世を安く送  
るや、よめゆき言ひ遣し、故あり、彼花世と操  
を姨姪の中あまごころ、僅う三四の違ひ、表面を  
妹と呼ひ、もと戸平がたより、現在主人の處女  
あり、取りけ大切、撫恤<sup>イタナヒ</sup>つ、日毎木辻へ通ふ街  
轎<sup>カゴ</sup>を昇身、身を粉と粹ひ、拵ども、元来蓄へあは上  
り、去年より母の大病あり、ぐう、家業も怠る

家内の器具も沽竭し、其日とさへ送るかぬる哉  
 操ら視るよ堪うのく、母とさうあり夫婦の者よ  
 も、南圓堂へ百日の間日叅あし百巻づの普門  
 品と誦ぶる大願を齋カケると詐す、稚あられど彼  
 小由ハ利護ある性質ゆへ、妙をよと緊く封口し  
 てもろとも又彼所へ往丸袖乞あしたる鳥目と  
 金と換え、國許より来る貢の金とつひあし、妙の  
 花世と與へるを、翌日か三月三日よて、桃の節供  
 のことあはせ、小芳を夙く起出で、一ッ二ッ沽まめと  
 とし雛と母の鏡臺の上と排ぶく餘念あく、遊び

狂ふや、犬張子、喙の缺たる陶子と桃を手折て挿  
 あふ、斯る貧しき住居よと、つら花咲の爺婆の  
 赤本開て方言まド里、雛と會解してきり、子供  
 と罪とあうまう、戸平と今日も毎時の如く母  
 のまがんと伺ひく、駕籠うち擔ぎ出往るを、操  
 と妙ようち向ひ、と、きんの御舊封とおたち飯里  
 何とばして、昔の御身よおあまをさき、又二ッは  
 朽葉さゆ、眼病平愈祈るため、南圓堂へ日毎の  
 叅詣、時あうぬ寒さゆへ、久、今日をくくしを氣合  
 が悪い、いふをおまへ名代よお叅まふされて下

きんせと憑むは花世をくち點頭、そんなあうく  
 しぐやのふあどよ、母さんのお眼が覺たう、その  
 お薬を上れたも、重衣アツキをして大事よかけ煩ふく  
 たもんあや、こそ小芳長オホシあしてゐるなしませうぞ  
 其代りよらよいお土産、買て戻う成待て居やと  
 こまもとつうを出て行、折めく来めく徳若屋  
 造がき、覗き首尾をよいうと目で言つた、此處へ  
 と腮セキハラヒて答ふる操、おらと承知と寸造が勿体モトメらし  
 く矜セキハラヒ咳カキ誰タレらう案内たのむ、誰何タレと操がよしく  
 しく手をつく、まど可笑オカシ堪コトえ、拙者ウツシヤを鹽谷判官

ぐ家来徳若寸造とりかき者今日つよく水棹ど  
 のお目見よ上られく然るま候よし、お局長、岩  
 藤イワフジどりの指揮シヨウよりつゝ迎ひの竹篋タケカネ、イヤあむさん  
 鉄打テツウチ轆ワタリめゆつめ里サト赫々セツセツ輝く茂シゲといくめといと  
 さと昇ノボちくまどく推察シヨウサせう、急イサびく准備シュンビの  
 よと、口クチのう出次第間シヨウジは合と、實と思ひ母朽葉クハ枕  
 屏風ビョウブを排除ヘイジく、さやうあうおまへきむを、御奉公  
 の奉謁ホウテツは今やうおつぐ遊アソぶくまは久諾クダク、姉さん  
 や戸平トヘどのむ、いめぐ承知オウチの事あ終ど、おまへの  
 病氣ヤマイの其中へ、いあと思ふあ、くおまを延て

おきゆいたとて理もあつことおつ志や至すは  
 戸平とりし躬をけり、嫁とりしを勿体あけまど  
 花世どのをけりあどと、孝行として下さるまはま  
 何おも不自由らごさうませぬ、申を迄をあらはれど  
 も、取りけ貴娘を大事の御身かみりし處は忽々  
 とおき申をのり心配、一日ありとも早い方グ此  
 婆ら選て安堵、ゆき貴方は苦勞さむとぞんじ  
 ます、三判官さむのお屋敷をどの邊でござりま  
 すと、問はれり寸藏老實とある。○上邸を扇が谷  
 南無三とを鎌倉だ、伯州でも遠過る、ろをきく、

この程奥方妍娘々、病氣よよつと御保養がて  
 八幡邊よは逗留彼山崎の津口を左へとを、判官  
 さむのは邸を幾這處へととお諮ねり、早速  
 相知を申さへしと、取はくろえとあはれ寄私  
 も彼邊へまつたことと有たをど、見も聞もせ  
 ぬものお邸つら項造宮あまはましたと、きりして  
 とつと思ひあがら、昔もく大むうし、弥勤十年  
 辰の歳諸神の建たる御屋敷、お廣い、で出ぎを  
 まを争へり、いともくお屋敷あんなに成見して  
 是は綾の縁が五百疊、錦の縁が五百疊、高麗縁が

五百疊千五百疊のたふと、さうしてやうつと敷き  
たを、己と名うゝ案じつを、さうして成忌と舞  
ひ出せ、戈藏、操を見ろ、又、あぐくと、風が觸生を  
身の毒、ア、く、此方、つと、朽葉、グ、手を、素、臥房、又、倡  
ひ、あぐくと、枕屏風を、引廻し、と、着る、物を、着  
換、う、と、口、又、と、つ、え、ど、あ、袖、の、態、も、飾、ら、ぬ、亂、生  
髪、つ、い、と、く、と、又、搔、揚、る、才、造、を、纏、袋、と、百、兩、の  
金、取、り、出、せ、ど、操、を、心、得、證、文、と、引、替、り、件、の、金、手  
と、兼、り、あ、ぐ、と、四、邊、を、視、廻、し、う、の、く、認、り、置、た、う、け  
ん、遺、書、も、ろ、と、も、側、ら、あ、離、又、並、ぶ、犬、張、子、の、中

と、隠、し、て、然、る、大、事、の、養、生、の、を、せ、と、う、の、聲、き  
つ、と、母、朽、葉、も、と、も、や、聞、を、搜、り、出、モ、出、出、を、を  
し、ま、は、り、定、め、し、今、日、を、總、模、様、立、派、と、お、穿、換、お  
と、此、を、處、を、た、つ、た、ひと、目、視、た、ら、此、ど、う、と、甲  
斐、あ、れ、この、旨、目、ど、搜、り、あ、ま、と、見、ま、と、争、う、と  
俵、を、操、を、愕、き、せ、ら、あ、以、時、の、神、あ、う、で、佛、の、前、に  
め、つ、た、打、敷、古、模、容、の、綸、子、の、黒、地、を、幸、ひ、と  
佛、檀、より、潜、と、外、し、て、膝、に、排、當、さ、ぐ、と、さ、を、を、莞  
爾、顔、と、こ、と、く、こ、を、數、村、さ、む、の、令、娘、子、隨、分、の、首  
尾、あ、ま、れ、ま、し、て、暑、さ、寒、さ、を、う、み、と、及、ぶ、食、物

二氣を注て、お煩の發ぬやうに、大事にお勤めな  
されませと、賣らるる往とら白髪母、歡ぶ折ら  
ら納戸より起出る小芳らぐらんぜあふ、ややく可  
笑ふ蔽膝してと、言ひかくる代操が打けし、アこ  
を姉が美巖衣を着て、やまを思やらふが、  
刺下其方も成長あると、ろろ一が方へ引取て、喃  
ふし朽葉さゆ、ヲ、そそく、小女郎とやう雜僧と  
やうにお使ひよきせし下きませと、イ何とあ  
く言ふことなむ、疵有脛一四邊ときよらく、合點  
やう糸を恍惚と、小由々二人が面くらちまもる、物

もえつと居たり、ま才造を打嗽遅引を第の  
手前拙者何とも迷惑々々、去来此としと儼格  
らしく、勧め々々、涙を隠し、暇乞々々、こく、  
操を表へ起出て、小手招して小芳を呼び出し、母  
さん父さんが、今あも戻らんしたと、私を尋ね  
あんしたふ、毎晩おしえ々々、おつと通る、花咲爺の  
この赤本、この處を毎時のやうに會解して聞  
せらと此身が往た處が知る、必を忘るる給ふ  
やと、餘波惜が、視く、ま、小聲、あつと家長  
さんお待遠々、ごまま志やう、イヤ幾待と成よる

浮世形六枚屋

言慣ぬ、儼語、困り果た、甘急、ゆるゆるかき入と  
 操を獲、打乗せ、足を早ゆ、飯を食、右も  
 知らぬ、主の戸平、劇し、起ち歸る、左右視廻し  
 上を口、忘し、煙管手、採り上げ、南無三、路で落  
 したと、戻て、矢張、終是、あんな、草、煙草の  
 くらげ、間費し、夫をさうと、母人、幾、目、  
 覺ました、今、塩谷、さむい、おや、さう、迎ひ、  
 来、操、さむい、奉謁、上ると、つ、装飾、も、人、手、  
 し、お、獨、で、其、處、で、お、召、換、銀、打、の、乗、物、を、往、は、た、

戸、こ、あ、る、路、傍、逢、ら、ま、ら、ぬ、と、い、ふ、戸、平  
 と、不、審、を、れ、を、然、り、し、こ、と、が、あ、れ、を、何、程、お、役  
 と、た、り、秘、を、と、り、一、通、を、私、と、お、相、談、も、あ、る、筈  
 の、と、い、ふ、理、と、劇、く、問、へ、る、朽、葉、を、打、笑、ひ、  
 此、方、衆、夫、婦、を、い、く、と、承、知、の、事、と、貴、娘、の、お、言  
 葉、よ、も、や、虚、言、ら、お、つ、と、あ、る、ま、い、と、れ、を、忘、し、  
 り、た、ま、し、い、否、々、此、戸、平、を、真、以、て、存、知、ま、せ、ぬ  
 今、途、を、見、た、輕、篋、お、身、を、逢、ふ、と、垂、を、下、し、  
 や、平、は、縣、ま、る、形、勢、何、と、し、て、も、合、點、が、往、ぬ、蹤、  
 追、憶、と、驅、出、ま、向、ふ、廻、つ、く、女、の、小、芳、を、父



さん、今姉さんの往ちやんした地を、  
 てか、さんあ、その身聞きおの、  
 早く言やまると氣を懸せど、  
 氣、側ある赤本いし開き、昔々  
 戸平を氣を苛ち、  
 操さぬめお行方、  
 事、何事、  
 と言、  
 往先、  
 下は居、

が、  
 たり、  
 又、  
 と、  
 と此犬を連、  
 や小粒と、  
 たり、  
 三、  
 止を、  
 雛の犬張子、

金が出ると、今の理解を大張子が、轉べが金が発  
 るとの謎々、中に入らるこの一通、何と両方へ申  
 置操と云ふる合點往きと、封おし切を母と云ふ  
 何と云や操さるの文章がある、と云ふ事、お  
 讀み聞しやと、耳時を知らせられ、驚きあふら  
 笑ふ紛らし、お氣配いあきれまはる、呉くも由國  
 許の所生の事が案じらる、おまへさるの尊恙が  
 お快よりあつた、お鎌倉へ私と下る安否を聞  
 てくは、お氣ささく適ちあふ、お宅へを戻りま  
 直と第一、おち着おと、宿下里子と逢をせぬと

夫婦の者へ遺書、イヤムし母お中人、風が  
 觸ても、お氣分よさるまはる、一寐しを  
 されませと、卧房と連行障子を建き、思ふ  
 ち、お獨り言、お操さる、お情け過る恨し、何程  
 阿娘が編笠ぶ面とお蔽しあさる、毎日通る  
 南圓堂、袖乞をさる、知らず何と云ふし  
 ませ、お噫嘻、身貧お此家産、とらみ下る御志  
 だし、夫を代むる、今日ま、特  
 と乾顔、陰を拜ん、居ました、それさくゆる  
 勿体お、お娘々の軀の代を、おんと浮世が

らまゝとやうと、<sup>トツカ</sup> 嘘許と坐<sup>ス</sup>くまゝに泣、何時の間  
 ころを飯をくんで、門口<sup>カド</sup>に動止をまゝ居る女房、<sup>カキヲキ</sup> 母  
 ろんあゝ操を彼廓へ、<sup>アラマシ</sup> 形勢を崖畧この遺書、<sup>カキヲキ</sup> 母  
 志や人の聞えぬやうに、讀む見やせと擲出せを、兼  
 る手おそしとねし開き、あゝ、一筆申し残し衆  
 らせ候、只今迄は夫夫婦と深く蓋<sup>フタ</sup>ひ、毎日く小由  
 と連<sup>ツ</sup>観音大士へ詣ると詐<sup>ウソ</sup>り、袖乞<sup>スソノコ</sup>し出、國許よま  
 の貢と申し少しおカ<sup>ラ</sup>うあま候へども、そまも  
 思ふやうに果敢<sup>カ</sup>とまめ、此やうに忽々々々  
 居候て、いよく貧苦の御身よあま候もん、うと

それが哀しく、塙の内の娼樓へ百兩に此軀を賣  
 り参らせ候、この金にて思ふやうに、朽葉さぬの  
 御養生あきれ何よあまも少しも早く、<sup>セウ</sup> 家業  
 に御取附、若も餘りいぬ金子なり候と、<sup>ク</sup> 鎌倉へ  
 下下し下さるべく候、これも卒<sup>ハヤ</sup>の浪人の事候へ  
 が、<sup>ア</sup> 御不自由がちと察し参らせ候、何もく取  
 急<sup>ア</sup> ぎ大畧<sup>カシ</sup> 恐惶<sup>ウ</sup> と、讀み下せり、戸平を聴<sup>ミ</sup> じ堪へ兼  
 へ件の金を把<sup>ヒツ</sup> 搦<sup>カ</sup>、<sup>モ</sup> 葱出を裳裾<sup>モスソ</sup> を花世を曳止<sup>キツ</sup>、<sup>サウ</sup> 佶相  
 變<sup>ハ</sup> へてこそや、何處へ往<sup>ド</sup> 志やんか、とく知<sup>チ</sup> せし事  
 この金返して操<sup>ウ</sup> 多<sup>ク</sup> 代<sup>イ</sup>、<sup>ハ</sup> 一<sup>ヒト</sup> 旦證文濟<sup>シ</sup> を上<sup>ウ</sup> ぐ

を、本金とさく措く、一倍増てもうくさぬ制度、私  
より現在姪のこと、勤めさるるを本意とありれ  
ど、斯あるうらを為方があひ、こは此文に書くお  
つと通す、此金を本錢とし身を粉と碎つと身上  
仕上げ、國許の姉さん御夫婦おみつぎ申して其  
内又身請くる他をあいと、さあぐ一言ひ宥め、母  
をさくさくあり、鎌くくつと、武家奉公と云ひ下し、夫  
婦つよく心を用ひ、金よりめして養生あしける  
よを、あどあく母の眼病平愈あしこれよあ代く  
から成得く、少し導めたり、くを、攝州浪華へ引

移りたるうら、斯く水棹を島の内の藝子とあを  
その名を小松と更めしが、容色好き其上は、刺發  
ある性質、あまらるる、全盛あまらるる方もあ、平常  
兩個の櫛を押し並るる挿しるるよ、浪花の人  
彼を渾号して、兩櫛の小松とを喚做し、く、ま、  
米商人佐吉と、操が行方志を、あまらるる、詮方  
あくこれ難波へ立歸る病氣保養め、其ためと  
く、時よふ其所、這處とく、あは、步行、月雪花の三  
紋をつけ、る、誰つとく、渠をも、緯號して  
三花章の佐吉と呼ひ、同し浪花に在りあ、さ

まゝの蕃華の土地を此れどいまぞ操りて環り會ひ  
 ぎるる五月雨霽り水無月朝日も勝鬘詣の戻り舟  
 唯は繫りて立ち出る情と戀の二擲小松と云  
 りと名と里の妓女夕風颯と吹りて散し模容  
 を花と視り蝶も跡追ふ堤づゝひよし其處へ往  
 りやんを花咲屋の阿花さんごごさんせ  
 ゐうと喚びけらしと棹を回し然いとやん  
 まゝ小松さんおまゝ何地へごごさんしを唯少  
 許した齋禱は勝鬘の夢染さるゝお参り申しを

戻り路今おまゝの内りへ往りてごごさんまとい  
 りお花が弁りて曳手數多といふる小松と  
 名を付たりと人さんといふるおまゝ愛染さるゝ  
 参りて餘り慾をござんを夫と然と今こゝへ  
 曾祢崎へお客を送り歸りて此の行ちが何  
 逢まぬところをござんしたおまゝもお船を何  
 故この戸平との然りて下さんせぬさ皆さんを駕  
 籠あせと餘りよの傳暑は廻り路も舟をのりて  
 あんの俄の思ひ付たのよおこし間もあつて話し  
 たりと花咲の内へ這入るを愛らし二階を娘の演習

浮世舟の扇風

十

の浄瑠璃かぐく久しき親の面打まゆ里くと語まを小  
松ふ吐息つまゆりりことかゆつたあき嬉しいこと  
かゆらふをと思ふに知らぬ獨言おをふとふと面視  
合せゆの浄瑠璃をおまへの室女お芳さんかごきんを  
あゆの鶴澤のお師匠さんが隣よりを幸ひと替古さ  
どくろ見るゆめの人赤たゆんの小兒か何なるゆりごさ  
んせぬと云つて向ふらち視やまゆを彼舟を戸平どの  
お客も大勢ゆりさうおおまへら此處へとらち連る二  
階へ上るわともあく又岸より着く家根舟とをさかめさ  
連る来る三人この頃名代の三ッ紋左吉と上を古めよく

廻る座敷の配劑加減とく狎客醫の藪原竹齋常の如く  
のせんとしの羽織鸚鵡とくしの物真似し深善二人左右  
ニ従へは是ううの貴さゆめところと一杯飲を歸らう  
あたる暑らうし心狭いとところもお氣が變つてお慰み  
と二人が悪口いとねらち先へらるる裏口を明く亭  
主の戸平が案内おつとゆけをのたゆふ此花咲屋ら  
舟宿中も普請のもの好才一番志のぶゆ釣き竹黒木よ  
杜鵑花つじの山もあき板塀づくしの建仁寺垣根む  
つぎと植ものゆめとところの奇絶々々とつのも變ら  
む竹齋ががしましき聲きつとあきおをちも二階を下

来り、珍らしい左言さゆ、さつさとお足の向らぬのら、南  
 の方又面白否々、こちこちも知る居る通、何處へ往らるも  
 相方と定ぬが、あれの生質、さうし餘りなびまかぬ、何  
 程氣の善母、おや人も、少しゆきれば、さうさ、彼左  
 吉とつふ奴ら、轉寐も、筆盤と枕よし、帳合の寐言を  
 つつたあを、若者より珍らしい、商好の遊びぎ、ひ好、事  
 さら二つ、あ、醫師も手を措ぶ、疾命より換らぬと、  
 おせ、さうめ、頑戯たが、癖は、あつ、近年ら家の妻は  
 省お、ぬ、ゆ、事、身代を、ら、始の花、章、三  
 紋、や、名をと、と、平常内へ来り居る、竹齋や、淺

善が異見を為ぬが、恨し、あ、あ、あ、つ、たと、管家の話  
 と、故、恰百日、た、あ、肩口へも出、あ、ん、だ、と、云、ら、ち、二、人  
 の牽頭、ども、を、や、こそ、可笑、ふ、日、和、あ、つ、た、南、無、三、く  
 と、づ、く、と、耳、を、ふ、さ、休、を、お、さ、ら、ら、ち、笑、い、この、雲、行  
 ぶ、と、實、は、今、夜、ら、あ、ら、ち、も、知、ぬ、ぬ、ぬ、吉、利、の、こ、る、ひ、と  
 云、あ、が、ら、さ、び、盃、を、竹、齋、が、手、よ、と、を、ゆ、ち、ち、四、邊、を、見、ま  
 こ、し、床、の、間、よ、三、社、の、託、が、掛、ら、る、の、ら、ま、さ、ら、ん、た、が、を  
 の、前、よ、大、張、子、よ、七、種、菓、子、が、上、ら、る、撫、牛、が、右、の、り、ら、  
 あ、ら、犬、と、ら、新、し、つ、と、つ、ら、れ、と、戸、平、が、目、語、し、ら、ま、ら、内  
 の、荆、妻、が、セ、ツ、め、を、と、ま、け、し、ま、し、て、あ、お、花、の、ゆ、を、ま、ら、大

事よひたしきと、言ひ紛らせを指おし筭へお内室さ  
んが、おんの年齢を見破した、此ことどうくお芳びくと云  
兒がゆねを、あるおど三十よを余程とくたを、笑へをお  
とふら竹齋を、叩く真似して起りゆく、深善が、ゆをを出  
益もあん口をきぬく、お内室さんをとを逃した、イヤ、お  
ととつへを此屏風を、男と女が連立を逃したをきるとと  
ろ、向うよ橋がいづら、画くゆるのを何地だらうと、引  
出をを亭主の戸平、もし暑苦しむ、摺帖をお置あをま  
し、そを矢張りの光景梅田を、さくら橋をの次  
が、曾祢崎橋、つらを、お初徳兵衛の、浄をの出来をぬ

木偶劇場の観牌を、ありの三糸よりひまいたを、屏  
風よしておをまいたと、話せを竹齋を、さし出其浄瑠  
理がゆねひ出したを、近年此處を名代の妓女、二擲の小  
松とを道行よ出さうお號、あるを三紋ニ、と並  
つらと對とや、割外題とや、のや、を、狂言名題よ  
うつらつけ、何と是ら、おを、のを、さし、左  
吉が打消し、あるを、已も名を聞たが、逢らせぬ小  
松とや、道行の屏風を、思ひ付るを、悪い對句、末の世  
まぐも此や、よ浮名を、のら、お初さんおん、心中をし  
く死ぬ癡漢を、譬つら、を、迷惑を、つら、を、今ま、相  
手



と定めぬおきらむ人の遊戯とてたうが藝子らうを物  
 買物金さへ出せむ自由とあるそは代眞實のなるやう  
 と思ふくあるら大駢子と人どいつをぶめドロおけ二  
 階を下まぐる二梯小松とゆつと面視合せおとあが送  
 る後影見惚く左吉を手は持し酒ぶくむきく吾膝も濡  
 の端とはあるのもちくび今の歌僮を渠誰じや儂がい  
 ま竹齋さぬの噂をつつた二ぐりの小松さんでござる  
 まふとさぬく左吉を茫然と盃あけそく帯を直しさ  
 今う彼をゆき遊ぐやうと心も空も變りて降く  
 る白雨をどくあつと沈々とおまけをささるる最究

竟者共ゆるふやきあひことそを立たる二人を打  
 つと戸平を供は小松を慕ひ島の内まで到るる。○座  
 敷もきんを床の内小松を背脊中向くものをも言を  
 糸をつぎあきく左吉を烟草くゆせあがく往時の事  
 を野夫らくく言ひ出してぬきあせると心はあがりあ  
 知らひとも大和巡り代為たうねる南圓堂がそあとの  
 凡音毎日々々きくくねく節心ゆきむとおりふ内何地  
 へおとんと行方を志す身を賣たとの人のうを法眼  
 と鼻の間おどふこの島の内は居るとら志くは大抵搜  
 したるくらふん備し今日巡りゆたら盡ぬ縁とおき

一人合點ガテシたるものも白癡アハハあまどてきあゝ折オリり來キやう  
 ちどよ否イヤららふと附合ツキアフららふをせうたやいのと  
 座落離ザラリと小判コウバネが十圓トウマンたのぞ紙ヒシは拵ヒナツきさし出し皆ミナの者  
 ばすゆゆ又纏頭マキアタ又とらせく餘ヒヨクまがらうバ浴衣ユカクも  
 買カフく着キやと、いへど小松コマツを見向ミムカせむ煙管エンカンおとて額ヒタ  
 又ゆく俯ウツく面オモをとし覗ノゾき宵ヨイあゝの雷鳴カミナリが氣色キシヨクが  
 くら薬ヤクもゆるあぜりのを言イやらぬと拿トルる手をまけふ  
 くあそとらひ氣キちひもさふいどさんせぬが何處ナニトへ  
 往イッるも對手アヘタテと定ぬがわんのちをびたゝが妓婦ゲイブらう里  
 物買モノカりの真情マコトがらると地チりうき居イるら癡夫アハカと悟サツた人

さんまたとらうのうきよのゆゑ、此小松コマツを知シるやん  
 せぬと直敢言スウカクへがあを俵ヒラあを先刺舟宿サツキが、いつたる  
 を二階ニカイがまゝ、そのやうに物扱モノツケのあ、ちて相方を定めぬ  
 も、其方ソノカタの往方ユウカタを尋ヒるゝ、這方コソナらや、も標ヒシといふ、慶女  
 と地チりあゝ居イるゝ、の、さんあゝ、五文三文袖乞イテ、相  
 應オウふ手の内ウチら下シさんせぬ、金カネさん出デせを自由ジユウとあゝ、  
 見下ミシら見ミたが腹ハら立ツ否イヤちやゆらあが附キらあゝの折節オリノヒ  
 ら來キやうのと、所トコロ深切シニホクふお志シし、あゝあゝ、うゝひの事コトふ  
 らが、ごさんせぬが遙トホのまゝ、さんあゝあゝの水真ミヅマコトひ  
 心ココロと知らシらば、うゝ、愛アイ染シさぬへお百度ヒヤクドうゝ、こきちや

と見くくたきんせし、ゆるそと志する書付を、出せむ左  
 吉が手よとを上げ、亥の歳の男、所志を以てし、願ひ  
 まわらせ候、三十六番の末の吉、どうしとぬき、年まじ  
 る、心ど夫と定め、人志、わづあんと、いふ、ませ、夫  
 あらう、身も真實、いしく口先、をらる、悟たせ、末の  
 徹らぬ、あむを、いつその事、を切、面をも見せ、  
 下さん、をふ、愛染、も聞へませぬ、あんの是がま、の  
 吉、ゆ、つふ、主の心、を、倦らぬ、のち、知ま、ゆる、と、御  
 闌の書付、引裂が、ま、鳴出、を、雷の尾、落々、と響く音  
 め、よ、と、い、わ、く、我、志、く、左、吉、と、い、と、身、を、倚、又、心

見合を面とゆ、若、真實、あ、あ、んと、ま、ま、あ、身、体  
 ら、主のま、命、を、ら、ま、と、い、く、も、い、あ、ぬ、あ、ら、ゆ、と、小  
 音、答、あ、る、ど、深、を、縁、の、初、め、あ、る、○、前、の、世、と、ま、も、結、び  
 ぬ、縁、や、あ、ら、ん、の、后、を、互、ひ、離、は、ぬ、中、と、あ、る、名  
 よ、し、負、た、る、三、花、章、の、月、も、通、ひ、雪、も、ゆ、い、花、を、ふ  
 ら、つ、其、年、を、夢、も、中、よ、く、果、る、又、起、ら、る、緑、の、春  
 小、ま、つ、と、つ、ど、他、の、客、を、せ、れ、く、ゆる、さ、ぬ、初、子、の、日、手  
 と、手、曳、ら、ぬ、ひ、く、駕、今、日、の、生、玉、を、い、天、満、其、處、よ、這  
 處、よ、と、う、あ、ら、ぬ、湯、水、と、つ、り、入、黄、白、は、垢、の、枝、た、る  
 當、世、男、と、世、間、の、と、を、沙、汰、内、の、と、を、き、母、妙、賛、い、ま、す、

糸く強顔<sup>ツツ</sup>らくるも左吉<sup>サキ</sup>がたれと奥の一室<sup>ヒトマ</sup>にやー込<sup>コ</sup>  
 我身<sup>ワガミ</sup>の側を放<sup>ホ</sup>きよら戀<sup>コイ</sup>しくと百<sup>ヒャク</sup>をあり、妙<sup>ミョウ</sup>わく小松<sup>コノマツ</sup>が  
 わく文章<sup>ブツ</sup>竹齋<sup>タケサエ</sup>が手段<sup>シケン</sup>もく目<sup>メ</sup>はつけがーの花<sup>ハナ</sup>瓶<sup>ビン</sup>も、お  
 し込<sup>コ</sup>きー地<sup>チ</sup>をむ、何<sup>ニ</sup>心<sup>ココロ</sup>あく左吉<sup>サキ</sup>を手<sup>テ</sup>よとを、夫<sup>ウ</sup>と見る  
 よま心<sup>ココロ</sup>は嬉<sup>ウレシ</sup>しく、四<sup>シ</sup>邊<sup>ヘン</sup>見<sup>ミ</sup>廻<sup>マヅル</sup>し漸<sup>シヅ</sup>々と半<sup>ナ</sup>分<sup>ブン</sup>むらを讀<sup>ヨミ</sup>とと  
 りく起<sup>チ</sup>出<sup>デ</sup>る母<sup>ハハ</sup>妙<sup>ミョウ</sup>贊<sup>サン</sup>交<sup>カウ</sup>をへやうと地<sup>チ</sup>りふたをど、地<sup>チ</sup>をよ  
 らどうもよめあり、日<sup>ヒ</sup>が好<sup>イ</sup>ら見<sup>ミ</sup>るたもと、差<sup>サ</sup>なを唇<sup>クハ</sup>の  
 中段<sup>チュウカン</sup>も開<sup>ヒラ</sup>くとりーや見<sup>ミ</sup>ら身<sup>ミ</sup>たろくと危<sup>アヤシ</sup>む納<sup>オク</sup>むふとろろ  
 へふとろくせと氣<sup>キ</sup>をどと、今日<sup>ケフ</sup>を天<sup>テン</sup>一天<sup>イツテン</sup>上<sup>ウヘ</sup>ゆけ、お  
 部屋<sup>ヘ</sup>へどきらく些<sup>チット</sup>の間<sup>ノマ</sup>、あをる日<sup>ヒ</sup>はあをぬと此<sup>コノチ</sup>方<sup>カタ</sup>

のくやんが十方<sup>ジュウハツ</sup>暮<sup>ク</sup>己<sup>ニ</sup>成<sup>ナリ</sup>る金<sup>カネ</sup>ちろ四五<sup>シヨウゴ</sup>百<sup>ヒャク</sup>兩<sup>リョウ</sup>手<sup>テ</sup>よとる  
 渠<sup>キツヤ</sup>奴<sup>ヌ</sup>めが女<sup>メ</sup>房<sup>ボウ</sup>よあふそまを平<sup>ヒラ</sup>らぬ此<sup>コノ</sup>内<sup>ウチ</sup>が、おさまらぬ  
 のよそをさむく下<sup>シタ</sup>を血<sup>チ</sup>忌<sup>イミ</sup>も、幼<sup>コ</sup>らんふ心<sup>ココロ</sup>よあ  
 まませると何<sup>ニ</sup>を云<sup>イハ</sup>ふやうたのあり、母<sup>ハハ</sup>を怏<sup>ウキ</sup>せとこれ  
 左<sup>サ</sup>吉<sup>キチ</sup>始<sup>ハジ</sup>のらちい這<sup>コッ</sup>方<sup>カタ</sup>めらうらよと遊<sup>アソ</sup>戯<sup>ビ</sup>をよと  
 ら、所<sup>トコロ</sup>のやうよ出<sup>デ</sup>るひく、悪<sup>アク</sup>い噂<sup>ウザ</sup>を伝<sup>ツタ</sup>へせと、第<sup>ダイ</sup>一<sup>イチ</sup>  
 内<sup>ウチ</sup>の令<sup>レイ</sup>グまらぬ、一<sup>イツ</sup>年<sup>ネン</sup>あむ辛<sup>シビ</sup>抱<sup>ダ</sup>して、何<sup>ニ</sup>處<sup>トコロ</sup>ぞ人<sup>ヒト</sup>の氣<sup>キ</sup>  
 の付<sup>ツ</sup>ぬ遠<sup>トウ</sup>い所<sup>トコロ</sup>も月<sup>ツキ</sup>の内<sup>ウチ</sup>よ、二<sup>ニ</sup>度<sup>ド</sup>や三<sup>サン</sup>度<sup>ド</sup>の趣<sup>ソウ</sup>びを、乃<sup>ノ</sup>公<sup>キョウ</sup>  
 の少<sup>シ</sup>も止<sup>ト</sup>らせぬ、さ、そのやうよ忽<sup>ツカ</sup>々<sup>ツカツカ</sup>せむと、帳<sup>チヤウ</sup>合<sup>カ</sup>ど心<sup>ココロ</sup>  
 為<sup>ナ</sup>たのよ、小<sup>コ</sup>兒<sup>エ</sup>よ甘<sup>カン</sup>いお代<sup>ダイ</sup>、喰<sup>ク</sup>せむと、金<sup>カネ</sup>持<sup>モチ</sup>よ、さ



やゝぬ前あつら止やうもゆらふと見ど神子どのご  
 ぎんを断つふも歸さしまのまづ身獨りよ聞入る  
 事むのう話してたも安の聲のきこぬ所よお称名を  
 申し居やうと足下く起る奥深き佛室へこそ入る  
 跡見ぬくつと左吉のまを倚およ能來くたもの  
 たのちぬおまが内へ來るあつら口寄はあつら來いそ  
 うせぬの逢をぬと竹齋まぬのお言づく急よお話し申  
 きぬぬあゝぬやうよあつら災難夫故斯いた姿よあつ  
 有似ら志う言ふ内よびの志をも汗よあをまいたお  
 まつらゆらふとらゆらゆらよ已が傍よ番をくお出

あつら志う言ふ内よびの志をも汗よあをまいたお  
 まつらゆらふとらゆらゆらよ已が傍よ番をくお出  
 うせぬの逢をぬと竹齋まぬのお言づく急よお話し申  
 きぬぬあゝぬやうよあつら災難夫故斯いた姿よあつ  
 有似ら志う言ふ内よびの志をも汗よあをまいたお  
 まつらゆらふとらゆらゆらよ已が傍よ番をくお出  
 らの思ひ付を神子志やといふた案の茶内部屋へ逃  
 らお看經くくく泣くも笑くもゆうきこつるゆづい  
 あつらまきあふら先刺とるあつら小松の文も意外ある  
 グてさまりた早く逢たいくと話のやうよ書きた斗ごお  
 んの事志やの譯が志せぬと問はるお花の目よ涙今  
 迄の貴郎よはくお蔽し申たあつらあつら況や他人の  
 きく前よ小松さんくと餘所くくいふあつら實  
 いまづが姉の子まくと志せぬと志せぬ現在伯母姪姪

洋由形六枚屏風

廿七

塔、鑊倉ろく、某との御鷹ゆづり、秘蔵のその鷹  
 と、そくした越度々御暇夫より、むつと前より私の花世  
 とつたをた、内をほろつと侍と、嬉奔してをめぐと、大  
 和の園まゝ、逃上り夫婦とあつたが戸平どの、内證を  
 姉さんと、おろろ文のとを交し、その内より退糧、あ  
 ること、聞きの悲しは、姉さんも途方より、わんの  
 親を哭寄と、たのふん妾を便りして、其地を行義あら  
 けたう、御奉公をせむと、彼小まつが水掉と、  
 十四の春より大和まぐ人を附け上り、とせむと、戸平どの  
 が轎押をやり、母子が憂命づまぐちとある身貧の住

居難加々姑御、目つらの見えぬ長の病氣、らの娘も見  
 ず、忍のゆ、私の娘の小由を連せ、南圓堂を浅ま、い  
 袖乞へ、呉ま、た、泣出さ、左吉、愕き、夫あ、操  
 と一所、袖乞へ、出た稚お娘、頃日義、大夫三絃の、替右  
 と、さる、ゆのお由、さ、つ、其時、た、小由と云  
 ら、おろつた、此の間、大き、あ、予、頃と見、念を  
 た、夫をよ、ゆ、その意外、あ、ゆ、の、あ、早、ふ、ま、た  
 む、昔、ゆ、の、ゆ、立、ゆ、ゆ、の、形勢、が、知、ま、せ、ぬ、夫  
 う、操、が、袖、乞、も、果、々、う、貫、ひ、も、あ、う、思、う、と、ゆ、私  
 等夫婦、又相談、も、せ、む、留守、の内、この島、の内、の徳若屋と

つふ、おとやへ百兩の軀を賣た遺書とその黄金が小由  
 離の犬張子此中うら出く内ハ騒動ふんや母の病氣  
 志やとく女房の姪あり主人あり其方又勤をせせ  
 ら男がたぬと戸平どのの半狂人ありをたを  
 彼方アツチ却り面目あり、叔母さ由免しく下さ  
 國の父さん母さんお浪人なるは貢納を  
 ぬとづ其悲しは譯も言ふに私身を況めし  
 母の親の片もさるるおとやの事おやるは國  
 ござる母さるるも孝行うと思ひまんと聲を揚  
 泣た

面今又志をいりませぬその眞實は感ト入る戸平  
 どのも得心し金よりして療治したるは姑母の目も  
 愈すのつた金を今の住居梅田橋へ引越り山  
 の舟宿商賣大あり小るをくらきもの元とつて彼  
 子のお蔭平常は覽るささしく通る犬張子  
 小松お思をさそれぬため姑母昔老實おを  
 を離せぬと大和よござるが氣よめど無理  
 へ呼りをし今迄は屋敷に御奉公とつて  
 の子の勤め知らずとい却るお氣がゆめやうと隔  
 る居るやどあはる國へは猶更秘しとるは今度



小松ぶと〜さん、私ぶ為の姉婿が、殿さむへめいふへさ  
 往時の武士は立歸り許字とやうぶらむが、操を此方  
 が採付る奉公さんの暇をとつて、鎌倉へつを飯せと、五  
 の年まぶらの子の側へ附く居た乳母の子、雪室柳助と  
 つみ男、今ら〜も見違ふ立派な武士が迎ひよ上を、  
 安治川に宿とつて、操さむのめつとめらさる、侍邸宅へ  
 案内して逢せ〜と日毎の催促耻をせ〜、今の身  
 を、つみの手間隙つ〜ゆどもさうし〜彼地が金と〜  
 のく、身請さ〜の戸平どのが、つよく國へ面向あ〜は  
 小松の〜とを櫛王國へ歸〜久〜ぶらぶ父さん

や母さんの、お面を見たりい〜るけれど、左吉さんと縁  
 切〜、他へ嫁を〜るあ〜、〜や死まんと泣く居る、此方  
 が身受いたふ〜、金椰移の的〜、譬へ金〜の  
 ろ〜、武士同志の結号、反古〜、ねとや〜、騷  
 動大和に居た時分〜、私、貴郎を〜ね〜、お世話  
 多〜と彼女が咄し、今〜も愛ら〜目をわけ〜、下さ  
 さまは〜、憚〜、算のや〜、存〜、身代の店お  
 ろ〜、今宵〜、ひは、馴染の、歌川屋へ〜の客が、小  
 松へ出る居るまをれば、ま渠は逢〜の〜、相談あ〜と  
 下〜、おろ〜、聲〜、語〜、左吉のま〜

浮世形六枚屏風

三十一

氣も漫ろさういふるが捨る措ぬ工、まゝも母者  
 人又明且叱らるる分のこと、そんな往ふがま待ふ、  
 歌川屋は四五兩債がゆき、揚をるまん否々さきも  
 ぐらゝあゝふ、まゝく方ハ先へ飯をや、もう日小暮まき  
 さい、此ともお早くお合敷ぢやと、お花を戻し筆笥の  
 着更曳出し、帯引まむる一室より、母妙賛の起出、神子  
 どのいあんといふ、話してまゝ、やと問、まゝ愕乎、と  
 いそま、は何も女やうと狼狽こといふ、おまを聞か  
 らも知り居る、大方其方の煩、小松といふ崇者、色と酒  
 の雙服、竹相の枕の睦言、昔の女身も弓取の大夏お

軀を忘せ果、今市人の身の上、ハ、めづるのあがみ、大切  
 金銀を放撒、二名が浮名ハ小柴垣、結たくらさ、庭  
 だ、あゝの、今がき、あぬと此母が、扇の陰や陽とあり、異見  
 をして、鬼と角と圓緒桶、方お蓋合、難る、まゝ  
 かせ、おちとの内の遊伴も、茨、目をつく思ひ、て、意氣  
 地とやうを立烏帽子、揺をま、おつる木の葉の露、吾が  
 身、めづる災難が、おつと出来たその時、車ハ海へ  
 船ハ山、逆さる、ごとも見やう、あゝ、まゝ、お、まゝ、氣  
 め、る、百、萬、年、心、生、口、ま、ま、や、身、代、大、事、ま、ま、や、と、つ、ひ、つ  
 ろ、つ、と、袂、よ、を、投、出、し、た、る、百、兩、裏、左、吉、ハ、夢、見、し、ど、と、く

ろく、お、戴々を面むけ、巫女へ初穂の百一升今夜ら  
 免し、ゆるゆる、旦の朝々見世の者の目の寤ぬ内歸  
 ろく、ど、か、是限おや、跡跡、ぐり、も母ら知てませぬ  
 と、接穂も雨露の恵、いろく、同じ色香、又咲とふの小梅を  
 他、散さ、と、おや木の思を深うせらる、○戀草の種植  
 そや、堂の島花、あな里を花、又まる、橋の名、さく、も梅櫻、  
 松ハ緑の曾祢、ざん、又、つづくよびや、又、三絃も、氣ハ  
 二上、ア、三下、心、せらる、三、紋左吉、お、あ、許、つ、も  
 音信を、母より、貰、九百兩の、金、腰へ、締、込、込、歌川屋の裏  
 河岸を、往、つ、戻、つ、見上、せ、奥の二階、又、志ん、ぢ、り、と、物案

じ氣、お、小松、が、姿、幸、四邊、人、ら、あ、あ、あ、来、た、代、た、る、  
 せの手拍子、戀、ひ、床、い、男の、面、夜、目、も、夫、と、視、く、と  
 つ、早、ふ、く、の手招き、氣、ハ、飛、立、と、翼、ハ、あ、詮、方、あ、ど  
 この内、あれ、バ、見、つ、け、ら、る、た、ら、な、や、ま、る、分、と、戀、ハ、聞  
 の黑板、塀、擡、放、を、音、ま、つ、つ、け、劇、ハ、鳴、出、を、犬、の、聲、嚙、付  
 たり、吠、あ、る、バ、雨、落、の、石、手、當、り、志、い、桐、を、投、る、其  
 内、懐、上、り、百、兩、包、を、ろ、と、お、つ、る、氣、も、付、を、石、と、諸  
 共、打、つ、く、を、バ、遙、あ、外、々、川、岸、又、繫、ぎ、と、め、く、屋、根、舟  
 の、挑、燈、を、ら、た、り、打、消、を、志、投、打、を、あ、る、誰、奴、や、じ  
 や、と、寐、惚、聲、を、く、り、あ、る、を、見、付、ら、る、と、あ、代、茶、々、二

浮世舟六枚屏風

三十四



のまゝこの金を垣花に付與し、おまを命といふは身  
 代の手附、よきと切つておまよつと捜せどくど切つて  
 こまを、今犬に打た疎重い石を命と思ふその、おま  
 た金をおまのたも志をぬる、こま手中にてもらふん  
 切つて、斬つて、おまのま心と、おまを、下を、  
 く、小松を、おまも、操侍、出い、こまの重なるも、死、  
 ぬ因縁づく、た、身受を、おま、命、生、居、  
 本國へ歸ら、おま、ぬ體、歸、おま、嫁、を、おま、  
 け、おま、の、手、の、此、身、の、おま、  
 る、流、石、の、妾、も、武、士、の、娘、守、を、口、の、持、を、居、る、こ、ま、を、殺、  
 く、と、男、の、死、神、に、誘、を、こ、ま、を、哀、を、お、ま、今、更、其、  
 か、別、を、お、ま、も、浮、世、を、望、を、お、ま、石、を、瓦、と、百、兩、  
 を、お、ま、を、お、ま、の、不、運、を、お、ま、死、を、お、ま、  
 お、ま、お、ま、も、諸、共、を、嬉、を、お、ま、  
 饗、堂、を、お、ま、頃、日、つ、を、お、ま、士、衆、を、お、ま、揚、を、置、を、お、ま、  
 た、お、ま、ん、せ、ぬ、こ、ま、僥、倖、人、目、を、お、ま、  
 究、る、表、を、お、ま、小、松、を、お、ま、御、容、を、お、ま、  
 素、知、ら、ぬ、面、口、を、お、ま、花、吹、心、を、お、ま、最、後、を、お、ま、  
 子、引、明、入、來、る、客、を、お、ま、小、松、を、お、ま、何、が、氣

く、と、男、の、死、神、に、誘、を、こ、ま、を、哀、を、お、ま、今、更、其、  
 か、別、を、お、ま、も、浮、世、を、望、を、お、ま、石、を、瓦、と、百、兩、  
 を、お、ま、を、お、ま、の、不、運、を、お、ま、死、を、お、ま、  
 お、ま、お、ま、も、諸、共、を、嬉、を、お、ま、  
 饗、堂、を、お、ま、頃、日、つ、を、お、ま、士、衆、を、お、ま、揚、を、置、を、お、ま、  
 た、お、ま、ん、せ、ぬ、こ、ま、僥、倖、人、目、を、お、ま、  
 究、る、表、を、お、ま、小、松、を、お、ま、御、容、を、お、ま、  
 素、知、ら、ぬ、面、口、を、お、ま、花、吹、心、を、お、ま、最、後、を、お、ま、  
 子、引、明、入、來、る、客、を、お、ま、小、松、を、お、ま、何、が、氣

又入らぬ中、初會の時も客館ザシキらゝむんと歸カヘるままい  
 んを裏のり入ウラり待マテりけ、何地ナニノチもあそんごごきんしを  
 急度吟味もあそりきと、馴染ナジミのあひかけ免マフしてあくと、  
 言葉コトバも色イロをりしれよる、袂タビも戸棚トノをうちあひり、客キヤクの何  
 とくも挨拶アイサツあくと、扇アヒをうち打ウちあそり、面オモテを詠カガりて居イるとと  
 くり、お花ハナの小松コノマツも何ナニの様子ヨシも人目ヒトメもあくと、話ワザきんと  
 虚ウソ許カサシ來キり、小松コノマツも小松コノマツさんおまへを彼人カノヒト見ミえと  
 ろ今日ケフも二見ニミのち客キヤクあそり、心易ココロカヨクいお人ヒトあね、まろく  
 此處ココへ這入マシらんせ、夫ウツとところをいあん、その其ソノお  
 の迎ムカヒひよ上ウヘた人ヒト柳助ヤナヅクといこの話ワザ方カタ、夫ウツもあそり、お中ナカへ、お中ナカ

耻ハジメあといと言イハひあそり、立タちも起オキきぬ後ノチも氣配キハヒひ否イナ々  
 々其方ソノカタより此ココもか、怎イッも面オモテが向ムカらむと、泣ナク出デる、お花ハナ  
 仁ニ沈シヅめ、お心配ココロカヨクも、おむや、御本國ミコクノ鎌倉カマクラとい、  
 引離ヒキワきたるこの浪花ななはな賤セい、業ノをあそり、誰タレ知る者  
 も、ごごきん、お苗字なななの瑕瑾キズも、お申マウさぬ、只今ただいまも、桃モモ  
 井家イヱも、奉公ほうこうも、雪室ゆきむろ柳助やなぎすけ以前いぜんの貴娘アノカの乳母チチの躰セガシ乳チ  
 兄弟ケイテイあそり、家來けらいあそり、拙者ウツクシが、お参マシた、御内證ミナトウシのち  
 耻ハジメもあそり、お花ハナも、お承ウケり、お合アヒ点マシ、お存ゾク存ゾク  
 間ま花世はなよき、おの言イハた、お合アヒ点マシ、お存ゾク存ゾク  
 お合アヒ点マシ、お存ゾク存ゾク、お合アヒ点マシ、お存ゾク存ゾク、お合アヒ点マシ、お存ゾク存ゾク

浮世並六抄屏風

三十六

花咲屋の姪との噂きく届ちる念の為、客とあつて四五  
 日以前表向のき一義、幼面疑ありと蔵中へきまき金と  
 とのへ、只今親方徳若屋へ對談のり、身の代償ひ、證  
 文を受取たまひ、今宵あし自由の身、細螺彈を、雙  
 六の相手のゆ、た此柳助、ま迎ひと、ゆりゆり、慙も  
 耻辱し打まて、御息災おま面だせ、早速おえせらそを  
 きたぐ夫と他人ああんぞのやうよ、お秘しゆりし、お  
 二人あが、些お恨みよ存じすれと、ゆりて泣く語て  
 ける、小松、更ちり側ぐま、お花も面目擲首し、操もつ  
 とりげとせとの心、元とつて私答、かゝ何とも

堪忍し、こを限つて下んまか、今度國の出世は就ま  
 下る、其身の幸あまど、彼子もお客のその中、適をぬ  
 中の人おらる、怎生貴方の椰移、國へいよ、よひや  
 つく、その男と夫婦よし、お二人、この浪花へ引くる  
 やうよ、いあるまい、あし憑り、小松も泪も咽ひ言、迫ら  
 ちるま、い海も山も、辭へらぬ、御恩を受た、この  
 身あま、且暮ら、お床、この體も此地、残るも、  
 魂魄を母さんの懐へ入る居る、こま、お地へど、愁よ、  
 武士の娘とつ、あし、薄志、あし人も知る、道はぬ義理、  
 かつ、ゆり、浪波の土とあ、ひだ、あし、ぬ、其方を頼、お

くわぐよ操の氣合グもひとも死だともいふくや里  
矢張くくもあわくたも國へのや志やと掌を合せお  
づ口説バ柳助の涙を合む目と角たふ氏より育ちあ  
耻あしいを薄情ある身と深ま上の空ある世と習ひ  
親の事も故郷のことも忘るゝわづの心よいのつお  
成るまされもしたは兩方グ私を右側へ召びあつたや  
るよの退糧しく居る内と髪をあらして樂々と法体志  
やうとありのふたきど操グ戻たその時よつら果たを  
るるあふい無やあふ悲しあつた其す居たが今  
度の僥倖早うつら歸るたも柳助さる憑みまんとは

家來さるよと手をばわくどのき付るも貴娘が可愛さ  
待障もくござる所へ妻々一人故らま志やうり法國  
よのきつきとした結締ゆござる詐まふたあ顯  
まると親檀那の御切腹あさるやうよあらうも知をぬ  
花世さるも同じやうよ鎌倉へ下るのをお進めいあさ  
らるる此地が夫婦と為るやうに其者もごんごお  
る堂島の米屋とやうとち万兩の分限も市人へ娘を  
遣す其婿の世話もあらふと召歸さるる古主をあらうを  
て此浪花へござるやうふは二方たと思召るもくく  
がこのやうよ腹立るのも操さるの身の上が大切に



へ、斯カクの事コトは存知ツキあり、今日ケフり翌日アシタありと日を  
 算ガクへ指サシをゆり待マツてござる、母御ハハノミさのこのお文章フミガキど  
 らんあまねく篤ツツクとは思案オモエあまねく下さるやせと、さ  
 出デまはれ小松コマツの手テよとと、表書ウラガキをば、操マツルどの参マツルる母ハハより、  
 此方コノカタ無事ムジヤクとゆをせし、お筆フデ又年トシのよつたこと、十四シヨウの  
 年トシ大和オホヤマトへ来キり、八年ハチネン拜オガまね親オヤの面見オモたうあま何ナニと  
 志シやう、とふゆあま今宵イマヨイも死病シヤウヤク受ウケたとき、母ハハさの  
 懐イダシき、臨終リンシヨウを仕損シトクひ、このまゝ耻ハジもさらさうあま案  
 じ過スぐのせと、親オヤのみ志シまこと、餘ヨリも吐ツくたもん  
 ると文フミを抱カキてくく消入クシユるやうと歎ナレま、何ナニあり斯カクを

言コトひくらめ二人ニヒトを返カエした上ウヘの事コトと思案オモエ定めく泪ナミダ  
 と拭ヌグひ、おんまゝとと、お父オヤと男オトの替カらぬ、さうさ  
 らうと思オモひ切キ明日アシタハ國クニへ歸カエらうあま今宵イマヨイハ今迄イマドケ心  
 易ヨクい人ヒトさん、と緩々ユルユルと暇ヒマ乞ヒたりぬを其方オノカタハ申マウ戻カつ  
 たも、と、ハ律義リツギの柳助ヤナギノタケノサトウハ、真マコトとゆひ、ち悟ヨコボび、ゆ  
 りのしる、然シカドハ明日アシタ目出メデたわやう、駕カを吊ツラせ、御ミ  
 迎ムカひ、いや、付ツか、あ、あ、何ナニありの仕拂シバヒひ、お  
 土産ミナト金子ゴウシの御用ミヨウもござる、必カナラまともは遠慮エンリョする、  
 花世ハナヨさの、い、種々シツシツお談オハシし申マウさるもゆねを、お宿ヤド  
 まくは同道ドウダウと打連起ウチツク、つくと、何ナニあり言コトひき、禊スエさん



くゞまのくゞまや唯々夫々留守して下さんせと隣  
 へゆゝゆゝ走り行影視ゆくまゝ小松が手を拿り奥の  
 一室に密に入ると聲洩きどと在りし屏風引廻せば群越  
 へ洩きまゝの隣の浄瑠璃雲心る水の面北斗の牙  
 影うつる星の妹背の天の河梅田のまゝを鶺鴒の橋と  
 契りしつゝまゝも我と其方の女夫星のまゝの文句ハ  
 此初徳兵衛屏風は為たる操の這観板も同じ人所も矢  
 張梅田をくゞま心中して死ぬ者と白痴とされハ笑ぐ居た  
 ぐ(浄瑠璃)のやるや昨日今日迄も餘所と言はるの翌日  
 我も噂の數に入ると死ぬ氣なるつたも不思議の縁

しきりく小松ハ泣出し不思議ととろのあんの悪縁意  
 外も私ハ繋つくとあんの落度もあるいおまんを冥途の暗  
 の道連はまゝと知りぬハ勿体ない(浄瑠璃)實ハ思えと  
 ぬあかしくも身も毒も知りぬまゝと知るやど他  
 の情死ハ人を殺すの金銀はつまつと死ぬゲ世の習ハ  
 夫ハひきまの身受ハ濟せも百兩りつゝ居たをど狗  
 めら此うけと捧はあつ夫ハ死る心なるつゝも戀路  
 へ迷ふ煩惱の犬張子をつゝの内をハ其方の思を忘る  
 ぬ為と此燈明も上る此れど此をよハ犬めが恨しめ  
 るく此の是吠切つとせめく拳を犬張子にせげふつ

も腹のせしむるんの咎るん犬張子と打倒せむ其内より、  
 轉び出たる百兩已や、こまひ、ゆねの落した金恵し、  
 此處へ這入り居たる、これ其方の許字が頓死をも為  
 るまじし情死するまひいひ及むぬ、其方の母御  
 の文何のり書かざる、讀ぶるやせしむる立られ  
 さ、柳助のり通も、武士と武士との嫁約及古まいる  
 ぬ此北文來世もよまんと肌は付此まじりつゝ居たる  
 ども、呵嘖と逢た目もくみ、妾執の雲霧も、文字が消  
 るい詮ひる、讀も此世の名もくると、親子の縁も封じ  
 めも切し開し文の中、これ鬨斗と昆布と、節分のもちり

下もの祝ひ言今が冥途の成行と、存知るの痛も  
 や、母の血の道りち、長文書と目が暈と平生のむき  
 らひるむと、子可愛さよ細々と道中息災も早く下  
 待入すむとせん、父の六十の御壽も、一門衆の振舞  
 も、其り下すのち、緩々と生魂の祝も、一と盆  
 まが延しすむるを、盆も新精靈親子の盃  
 嵐尾草の露の手向し引、草葉の陰も戴くとん  
 御二人のお歎き、想像も、何事もく、追  
 付愛度目り、申すも、賢くも、人の目出度  
 こし、國を隔て、ごさんしても、無や夢見が惡から、登



浮世狂ひのち居る主人の恩親の慈悲探るる由  
 志をぬ故郷の戀しき此文を見ぬるべし我身の歸參か  
 るひしよりつ追もまじく市人<sup>テロニ</sup>も朽果<sup>クチハテ</sup>んふれし  
 のふのも其方の蔭心の誠が届くときわく小松を飛  
 立<sup>ト</sup>るしき戸平も共勇立歌川屋の裏川岸が客  
 待<sup>マ</sup>間<sup>マ</sup>よりくくやううた屋根舟の挑灯をらる打  
 消<sup>ス</sup>磔<sup>シ</sup>をみけえし百兩包不思議するらんじま  
 たが屏風の陰が話しを承<sup>アテ</sup>る貴郎の黄金犬は打  
 る磔<sup>シ</sup>の仕<sup>シ</sup>はうつくぬも犬張子犬がくろんご宝が  
 出る繪解<sup>エトニ</sup>の艱苦<sup>ケンク</sup>の昔しく昔し話しの花咲屋今より一

期<sup>キ</sup>榮<sup>カ</sup>へん吉瑞お嬉しかり小松きぬしをた立たる  
 その處へ尋ねんが柳助お花起<sup>キ</sup>度<sup>タ</sup>始終をき無事  
 と怡ぶ歸參を悦ぶ隣のきりも祝儀の淨瑠璃常盤か  
 きたの真木<sup>マキ</sup>のつづ絶<sup>ツ</sup>びつとせも萬々年治まる民こ  
 そ目出度くれ斯<sup>カ</sup>く小松左吉柳助ら急ぎうめく下  
 らくれ絶<sup>ツ</sup>く久しき親子の對面その歡び更<sup>マ</sup>はつひつ  
 らはるる由覺へば殿も御悦喜限るる數多<sup>アマタ</sup>の祿を  
 給<sup>タマ</sup>る元の水間島之助は起<sup>キ</sup>歸<sup>キ</sup>る小松と婚禮首尾よく  
 とのひ戸平おるる彼米屋の跡を經<sup>ツ</sup>ぎ何<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>も父  
 母は孝行を盡しければ男女數多の子を儲<sup>モ</sup>け愛<sup>メ</sup>たきこ



